

## 巻頭言

### 副院長就任のご挨拶

市立札幌病院  
副院長

向井 正也



この度、副院長職を拝命した向井です。主に内科系を担当させていただきます。また、これまでと同様にリウマチ・免疫内科と血液内科を中心に診療しております（血液内科はカンファレンスと総回診だけです）が、4月から事務取扱として呼吸器内科部長と薬剤部長も兼任しております。これに付随する院内の多くの役割も兼ねる事になっています。さらに札幌市医師会副会長も同時に拝命し、院外の多くの仕事も加わりました。

昨年、理事就任の際にも自己紹介いたしました。改めて自己紹介させていただきます。私は昭和30年の札幌生まれで、父は国鉄職員でしたが札幌以外への転勤がなかったため、ずっと札幌育ちでした。1981年に大学卒業後は直ちに中川昌一教授が主宰されていた北大第二内科に入局し、1年間の帯広厚生病院での初期研修と北見赤十字病院への1年余の出張、学位取得後の札幌社会保険総合病院勤務を経て2年半程の米国留学以外は長く大学病院勤務でした。1997年7月から当院に勤務しております。それまでは免疫系の血液疾患は経験していましたが、当院勤務後は経験した事のない血液系の悪性腫瘍の診療を河野通史前部長のご指導のもとで行わせていただき、自己末梢血幹細胞移植にとどまらず、同種末梢血幹細胞移植も主治医として経験でき、大変にやりがいのある仕事でした。



「シーズナルガーデン」

今年もボランティアの皆さんが育てている花々が病院周辺に見事に咲いています。

ただ、リウマチ、血液、アレルギーはそれぞれ専門医制度が異なり、大学でもそれぞれ別の研修体制になっている事から、私が科を担当するようになってからはリウマチ・免疫系の担当と血液系の担当を徐々に分離するようにはしておりました。すると血液内科の負担がきわめて強くなり、その時々病院管理者にご理解いただき現在では血液内科4名、リウマチ・免疫内科は私を含めて3名になっております。今もこの二科の先生には随分無理をお願いしていますが、十分に答えていただいております。

当院の目標は、断らない医療と地域医療の支援と連携にあります。このためには、急性期病院として当院の役割は入院診療を中心に行う事にあります。また公立病院という役割からも地域の中で急性疾患の入院を引き受ける事が使命になります。そもそも、hospitalの語源からしてhospitalityと同義ですから、滞在する方をもてなす事が主体になります。医療保険制度が異なるにしても、欧米の病院では外来に落ち着いた慢性患者があふれているという姿はありません。本来の病院の外来は入院が必要になる可能性のある患者と退院後の再燃の可能性についての経過観察をすべきです。落ち着いた患者さんは地域のかかりつけ医にかかっていたいただき、外来診療より入院医療中心の診療にすべきと考えております。

今後、益々地域の先生達との絆が重要と思いますので、よろしくお願い申し上げます。

